「梅桃(ゆすらうめ)」

島本幸昭

毎年、春の訪れと共に庭の片隅で梅桃が小さな花をつける。梅雨時期になると赤く透き通る様な丸い実が群がって先へと駆け上がる。指で触れると呆気なく掌(てのひら)に溢(こぼ)れる 。愛おしむ様に口に含めば、日本中が戦火に脅(おか)えて逃げ惑う昭和20年へと引戻される。

時恰も私が小学4年生を迎える頃であった。一家はその半年前に、大阪から戦禍を逃れて郷里の広島に引き揚げて来たばかりであった。

ところが大本営や軍港を控えた広島の上空には、連日連夜敵機の襲来で、学校にも満足に行けず挙句の果ては学童疎開に加わる破目となった。

嫌がる私に両親が言うには、万が一空襲が激しくなって何かが起きた時、私だけでも残れば安心できると諭されて、不承々々(ふしょうぶしょう)県北の山村の寺に向かう事になった。

その出発を間近に控えた頃、庭にそれ程大きくない木が他の木の陰になって小さな薄桃色の花を咲かせていた。

母に問えばユスラ梅と言って花の散った後に紅い実が生り、食べると結構美味しいと言う。それを聞いて気に掛け乍(なが)ら広島を離れた。

山寺の不自由な集団生活にも漸(ようやく)く慣れたころ、2カ月振りに母と妹が面会に来て呉れた。

駅から山寺まで道程は幼い5歳の妹には過酷で私が負ぶってやると意外に軽く、見ていた母親は兄らしくなったと喜んで呉れた。

山寺に漸く辿り着き(ようやくたどりつき)夫々(それぞれ)の親子の団欒が始まり、母が携えて(たずさえて)来た数々の心尽しの中に紅いエンドウ豆がアルミの弁当箱にぎっしり詰められているのを見て、母の方を窺(うかがう)うと母は此れが家の庭のユスラ梅だと教えて呉れた。恐る恐る一粒摘まんで口に入れると、初めて味わう甘酸っぱい味が口に広がり、中から小さな種が舌に転がった。

母は今日の日に間に合って良かったと笑みを浮かべ、妹が食べたがるのを宥めながら待たせたと言った。

二人で見る見る中に種の山を築いたのを見た母は目に光るものを見せた。自らは一粒も口にしなかったのである。

翌朝母は、帰るに際して、空襲などでは死なないから安心して勉強する様にと言い置いて再び元の道を連れて広島へと戻っていった。

あれ程固い約束をしたにも拘わらず、8月6日、父や妹共々、私独りを遺して原子雲の風塵と化し、二度と私の前には現れなかった。

梅桃は春が巡り来ると往時と変わらない紅い実をつけて、逝った者達を偲ばせ、過ぎし日を彷彿とさせる供養の数珠となる。

合掌